

スクールソーシャルワーカー活用の意義と課題

—スクールカウンセラーとの協働に影響を及ぼす要因—

○ 目白大学 氏名 大崎広行 (1764)

キーワード：スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー・協働

1. 研究目的

2008年度から「スクールソーシャルワーカー活用事業」が開始され、今年（2012年度）で5年目となる。導入初期から多くの自治体で課題とされてきた「スクールカウンセラー（以下、SC）とスクールソーシャルワーカー（以下、SSWer）の住み分け問題」は、今なお十分な検討がなされないまま試行錯誤の実践が続けられてきており、見切りを着けた自治体によってはSSWerの配置を断念するところも出始めている。

実践現場におけるSCとSSWerの関係は、SSWerの配置形態や勤務日数、期待される役割によって大きく異なる。大阪府が進めているSSWerの活用のように、小学校を拠点とし、ケースアドバイザーの役割が中心の場合には、金澤(2009)の指摘したSCとSSWerの協働は可能であろう。しかし、配置形態が中学校や小学校を拠点とし、同一学校内にSCとSSWerが共存する場合には、さらに別の視点からの分析が必要である。

そこで、本研究においては、同一学校内にSCとSSWerが共存する場合の両者の協働関係に影響を及ぼす要因について、配置校における実践事例および教育相談体制の分析を通して考察していく。

2. 研究の視点および方法

SCとSSWerの住み分けや協働を論じる場合、これまでは両者の専門性の違いについて論じられることが多かった。しかし、ミクロ実践のレベルにおいては、両者は相当重なりのある仕事をしており、活用する側（学校）においても両者を区別して活用することができていないのが現状である。そこで、本研究ではSCとSSWerのミクロレベルでの実践領域を「共通領域」、メゾ・マクロレベルでの実践領域を「協働領域」と設定し、これら2つの領域での協働の阻害要因と促進要因の分析を行った。

本分析に用いた事例は、これまで報告者がSCとして勤務してきた3つの中学校（A県B市2校、C市1校）でのSCとSSWerとの協働事例と各中学校の教育相談体制、各自治体のSC・SSW活用体制の事例である。

3. 倫理的配慮

分析に用いた事例は、学校名および自治体名が特定できないように配慮して記述するとともに、本報告書の作成に当たっては、資料提供機関の資料開示規程および本学会の研究倫理指針に基づいて作成した。

4. 研究結果

(1) 共通領域（ミクロレベル）における要因

この領域の主な阻害要因には、「SSWer の勤務日数」「勤務日」「勤務時間」などが挙げられる。SSWer の勤務日数が SC より多くなることで、校内での面接を中心とした SSWer の活用頻度が増し、結果として SC の活用が抑制される結果となる。また、SC と SSWer の勤務日を別日に設定したり、勤務時間のすれ違いが生じたりすることによって、SC と SSWer との情報交換が難しい状況が生じ、結果としてケースの共有および連携に大きな支障を来すことがわかった。

また、この領域の主な促進要因には、「教職員の信頼」「学校管理職の関与」「事業担当アクター（指導主事）の関与」などが挙げられる。中でも学校管理職と事業担当アクターの関与が、SC や SSW の協働実践の下支えとして重要である。

(2) 協働領域（メゾ・マクロレベル）における要因

この領域の主な阻害要因には、「県教委の主導」「事業の本質的理解」「事業担当アクターの異動」などが挙げられる。SSWer の活用を国の事業として実施する場合は、政令市と中核市以外は、必ず都道府県教委が関与することとなる。都道府県教委がいつまでも主導権を握り、事業の直轄運営を行うことで、当該事業は市町村に根付かないものとなる。また、補助事業そのものに対する理解が、国・都道府県・市町村の各事業担当アクター間で異なる場合、当該自治体における事業化への意思決定に影響を及ぼすこととなる。加えて、各事業担当アクターの異動により、事業そのものの継続性が損なわれ SC と SSWer の協働にも影響を及ぼすこととなる。

また、この領域の主な促進要因には、「事業担当アクターの思い・意思・意欲」「政治家の関与」などが挙げられる。中でも当該事業に直接関わる事業担当アクターの思い・意思・意欲は、SSWer の協働領域での実践を支える重要な要因である。

5. 考察

SC と SSWer は、ミクロレベルでの実践領域においては、両者の専門性が見えにくい領域であり、SC と SSWer が同一学校内で勤務する場合には特に注意が必要である。SC より勤務日数が多く、使い勝手のよい SSWer に SC 本来の業務が集中しないよう配慮する必要がある。また、メゾ・マクロレベルでの実践領域は、SC が SC 本来の業務を遂行するのに適した校内環境の整備等、SSWer 本来の専門性を発揮する場として SC との協働に活かしていく必要がある。